

# 日系ブラジル人研究における定住化議論の検討

## Examination of discussion of making to settling down in Japanese brazilian research

長 光 太 志

### 要 旨

本論の目的は、日系ブラジル人の定住化議論を時系列で整理することである。その際、「定住化必然論者」が依拠するS. カースルズとM. J. ミラーの「4段階モデル」を参照し、その上で「定住化必然論」と距離を取る「顔の见えない定住化」の論理を検討する。この事により、定住化論議の分岐点を明確にするとともに、両立場が合意している構造が、2008年末の不況の中でどのように変化するかも考察する。

キーワード 定住化必然論 4段階モデル 顔の见えない定住化

## 1 はじめに

1990年の入管法改定により、日系人の日本における滞在条件が緩和された。これを契機として、日本に「デカセギ（期間限定の単純労働による賃金獲得）」を目的とした日系ブラジル人が大量に流入し始める。90年代末には、外国人登録者数に占めるブラジル人の割合は15%前後に達し、その後もこの比率は大きく変化していない。こうした日系ブラジル人によるデカセギの増加は、多くの研究者を刺激し、様々な研究が発表された。

その中でも重要なテーマとして議論され続けているのが、日系ブラジル人の定住に関する動向である。彼女ら／彼らが、デカセギ労働者として一時的に滞在するだけなのか、それとも今後の日本社会の新たな構成員として地歩を固めていくのか、研究者の間でもまだ見解の一致を見てはいない。だが、日系ブラジル人の流入増加から20年近くが経ち、定住化を巡る議論も徐々

に深まりを見せている。本章では、こうした日系ブラジル人の定住化議論を時系列で整理し、現段階での課題を抽出したい。

## 2 初期の定住化に関する議論

### ～長期化と反復デカセギ～

### 2.1 最初期の日系ブラジル人研究に見る定住化

日系ブラジル人の流入が注目され始める90年代の前半頃から、日系ブラジル人の定住化傾向に関する先駆的な研究は始まっている。例えば、定住化問題に関わる最初期の報告を挙げるなら、「ヒトの国際化に関する総合的研究——特に外国人労働者に関する総合的研究」（山下 1992）の1つである「日系ブラジル人労働者の実態調査 群馬県大泉町とサンパウロ市郊外スザノ市日系人集団地福博村の調査を通じて——『永住型』・『分居型』・『出稼ぎ型』の基本3類型 補遺 JAMIC 設定入植地出稼ぎ状況」（喜多川・藤木・嶋 1992）や『日系人本邦就労実態調査

報告書』（国際協力事業団 1995）あるいは『浜松市における外国人の生活実態・意識調査』（浜松市企画部国際交流室 1998）などが挙げられる。

こうした初期の調査や報告は、貴重なデータを示してくれる一方で、単純なインタビューや集計結果の提示に留まっている部分も多い。定住化議論に限って言えば、質問の背後に、定住化に関する問題意識が見え隠れするものの、デカセギをする日系ブラジル人の長期的動向に関する知見の蓄積がないため、現時点での状態を記述することしか出来ていない。そのため、これらの調査結果から、日系ブラジル人の定住化傾向について論ずるのは難しい。ケース数の少ないインタビューや、ワーディングに但し書きのある設問の回答傾向から、定住化の可能性を読み取れないこともないが、一方で、大半の日系ブラジル人が母国への帰還を希望していることも無視できないからだ。

そして、こうした定住化傾向の捉え辛さは、調査手法の限界だけに起因するのではなく、初期の日系ブラジル人たちが持っていた葛藤にも由来するように思える。彼女ら／彼ら自身も、自らの今後について語ることが出来なかったのではないだろうか。ただ、研究者がそうした状況も踏まえて解釈を加えていくためには、デカセギという現実そのものが、もう少し歴史的厚みを持つまで待たねばならなかった。そこで次項では、90年代前半の調査結果を踏まえて発表された90年代の後半から2000年にかけての議論を見てみよう。デカセギの増加が始まって5年から10年が経過すると、定住化議論の中で、過去のデータや研究成果を踏まえた解釈が現れるようになるからである。

## 2.2 滞在の長期化と反復デカセギの発見

90年代後半の日系ブラジル人研究としてまず目に付くのは、渡辺雅子を中心とする共同研究である。1995年に発表された、この共同研究は、

この時期の日系ブラジル人研究の中では最もボリュームのあるものの1つである。そして、この研究の中に、日系ブラジル人たちの将来展望や滞日長期化について触れた箇所がある。

例えば、石川雅典（1995：120-3）は、群馬や浜松で行った聞き取り調査から、日系ブラジル人たちの将来設計についてかなり不透明な印象を抱いたとコメントしている。彼の解釈では、家や商売の資金作りを目的としてデカセギを行う者も、貯金そのものが自己目的化している者も、ブラジル経済の動向によって左右される可能性が大きく、長期的な展望には繋がらないのだと言う。また、同じ共同研究の中で、渡辺（1995：407-9）も、教育問題に関連させて、帰国予定は大体の家族において延長されていると述べている。

これらの研究成果を受けて、渡辺／アンジェロ・イシ（1995：615-7）は、共同研究の末尾で、日系ブラジル人のデカセギ長期化の原因を幾つか挙げてみせる。以下に整理してみよう。まずは、基本的な構造として日本とブラジルの経済格差である。その上で、ブラジルに特有の要因としては、「経済不安」や「治安の悪さ」あるいは「不動産価格の上昇」などが提示される。日本にある要素としては、日本が不況に陥り、目的の金額に達するまでの時間が延びていることや、日本でもブラジル式の生活が可能になった点が指摘されている。他には、家族の結集によって帰国へのインセンティブが下がったことも見逃せないようだ。

また、こうしたデカセギ長期化の議論に加えて、渡辺は「反復デカセギ」についても報告する。渡辺（1995：26-8, 613-5）によると、来日する日系ブラジル人の中には、一時帰国一再来日を繰り返す反復デカセギ型の者が含まれるという。こうした人々の中には、一度はデカセギを終え日本に戻ったが、様々な理由で再びデカセギを始めた者から、日本でのデカセギが長期化したため、盆暮れにだけ母国に戻るように

なった者までが含まれる。

渡辺の報告した「反復デカセギ」は、下平好博（1999：262-4）の日系ブラジル人理解に影響を与え、「定住」ではなく「反復デカセギ」という論調を作りだした。それをより精密に議論したのが森幸一である。森は、「反復デカセギ」の概念を整理し、「還流型移住」という新たな概念を提示して見せた。以下では、森の「還流型移住」の議論を見てみよう。

森（2000：347-52）は、日系ブラジル人の日本滞在期間が長期化しており、彼女ら／彼らのデカセギが、「単なる一時的出稼ぎとは考えにくい」という認識に立って議論を始める。森によると、こうしたデカセギの長期化は、日系ブラジル人の「定住」「永住」という事態を想像させやすいが、そうした戦略が日系ブラジル人自身によって選び取られていると分析することは難しいという。むしろ日系ブラジル人が取っている戦略は、「一時滞在」と「定住」との中間地点にある移住形態だというのが、森の主張なのである。森は、この中間的な移住形態を「還流型移住」と名付けた。

この「還流型移住」の概念は、内部に4つの基本類型を持つ。1つ目の類型は、日本国籍を持つ移民1世によって行われる反復デカセギである。彼女ら／彼らは、日本国籍所持者であるので、日本に入国する際には何の障壁もない。しかしブラジルでは永住権を取得して生活していることが多いため、2年に1度は帰国して永住権を延長する必要があるのである。森は、この類型を「Uターン」デカセギと呼んでいる。2つ目の類型は、「デカセギの職業化」とでも呼ぶべきパターンである。これは、90年の入管法改定によって成立した類型で、一旦デカセギの目的を達し帰国した後も、「事業の失敗」や「学業復帰の困難」などの事情から2度3度とデカセギを計画し、反復デカセギを繰り返す人々を指している。3つ目の類型は、「デカセギ成功型」とでも呼べる類型である。数は少ないが、

デカセギで資金を得てビジネスを成功させ、日本とブラジルを行き来しながら、事業を展開するような人々を指している。4つ目は、デカセギを行いながら日本への再入国手続きを行ってブラジルに戻る、「一時帰国型」とでも言うべき形態である。一時帰国の期間は、数週間から1年にも及び、ブラジルに家族や事業を残している者が多く行うようだ。また、こうした「一時帰国型」の還流を行う日系ブラジル人は増加している。

こうした「還流型移住」が発生する要因として、森が挙げているのは以下のものだ。まず両国間の賃金格差がある。次に、日本の側の要因として、日本労働市場の単純労働者不足や入管法の改定による就労の合法化があり、ブラジル側の要因として、経済的現実と治安の悪さや制限された市民権などがある。そして、それらの問題が、両国間にまたがった移住労働システムや航空ルートによって結び付けられることで、還流型移住が発生するというのである。

ところで、渡辺が挙げた「デカセギの長期化」の要因と、森が示した「還流型移住」の要因を比べると、両者に共通点が多いことが分かる。さらに言えば、両者の共通点は、日系ブラジル人のデカセギを成立させるために必要な要素のようにも思える。もしデカセギを成立させる要因が、同時に「デカセギの長期化」や「還流型移住」をも帰結するなら、両者はどのような関係性にあるのだろうか。それを考えるために、もう一度「還流型移住」の類型について検討してみたい。

「還流型移住」の4つ下位類型の中で、多くの日系ブラジル人が属していると思われるのは「デカセギの職業化」と「一時帰国型」である。しかし、ここで注意したいのは、「デカセギの職業化」と「一時帰国型」は連続的な類型であるという点だ。確かに表面的には、デカセギのために訪日を繰り返す者と、長期休暇を利用して本国を訪問する者とでは、同じ「反復デカセ

ギ」と言っても性質が異なるように見える。だが、それは現象の両極を見ているからであって、その間には、どちらにも分類しにくい事例が無数に存在し得る。もちろん、連続的であることをもって類型の無意味さを訴えるのはナンセンスであるが、「デカセギの長期化」と「還流型移住」との関係を考える上では、この連続性が大きなヒントになる。なぜなら、「デカセギの長期化」によって、「デカセギの職業化」生活を送っていた日系ブラジル人が、「一時帰国型」生活に変容していくのではないかと考えられるからだ。

森が指摘していた「一時帰国型」の増加傾向も、こうした考え方で説明することができる。もし、「デカセギの長期化」が「デカセギの職業化」から「一時帰国型」への変容を促しているのだとしたら、森が否定的に取り扱った日系ブラジル人の定住化傾向を認める考え方に、再び注目する必要がある。なぜなら、こうした変容は、日系ブラジル人の生活の軸が、ブラジルから日本に移っていくことを意味しているように思えるからだ。「デカセギの長期化」によって、ブラジルから日本への生活基盤の移転が起きているとすれば、やはりその先に定住化の可能性を論じる必要があるだろう。

こうした議論の流れは、日系ブラジル人の研究史とも重なり合っている。日系ブラジル人の定住化について議論する際に思い描きやすいのは、定住化について「認める立場」と「認めない立場」の対立である。例えば、森もそういった想定の上に議論を行っている。しかし、具体的な日系ブラジル人研究を参照していくと、2000年までの議論で、明確に定住化を主張している議論は、それほど多くない。多くの議論は、日系ブラジル人の「デカセギの長期化」か「反復デカセギ」について報告しているのである。従って、研究史的に見れば定住化論を真正面から主張する論者の登場は、2000年以降の議論に持ち越されているのであり、そうした論者の登場は

1つの事件であったと言える。そこで次節では、日系ブラジル人の定住化傾向を認める議論について検討していきたい。

### 3 必然としての定住化

#### 3.1 定住化を取り扱う研究

日系ブラジル人のデカセギが始まってから10年ほどが経過すると、定住化に関する研究も深まりを見せる。例えば、エウニセ・A・イシカワ・コガ（2000：139-42）は、日系ブラジル人の日本での生活スタイルは定住へと変化しているが、日本社会からは相対的に隔離されたパターンを形成していると主張した。

彼女の直接面接調査によると、当初、日系ブラジル人たちは、安い食事と必要最低限の生活物資だけを購入し、家と職場を往復するだけの生活をしているが、次第に日本での生活を大事にしたいという気持ちが芽生えてくると言う。

また、日系ブラジル人の量的な増加は、彼らが多く集まる地域に、ブラジル人によるブラジル人のための商店を成立させることが分かってくる。そして、こうした本国ブラジルの食品・衣服・新聞・雑誌・CDなどが充実する商店は、個人的な消費活動の他に、日系人たちが集まり情報を交換する場所としても機能する。こうした情報交換が積み重なると、そこから日系ブラジル人によるエスニック・ビジネスが発達し、相対的に日本社会との接点を減少させても、日系ブラジル人が生活できる空間が生み出されることになる。

こうした状況を、エウニセ・A・イシカワ・コガは、日系ブラジル人の日本での生活スタイルは定住へと変化しているが、日本社会からは相対的に隔離されたパターンを形成していると見なしたのである。

彼女の研究は、日系ブラジル人の定住に関する意思と、彼女ら／彼らの具体的な生活様式を分けて分析するものであり、その点は、後に見

る定住化必然論の形式を先取りしている。ただ、日系ブラジル人の定住的に見える生活スタイルから、必然的な定住化という結論までは引き出してはいないように思われる。

こうしたエウニセ・A・イシカワ・コガの調査結果から時を待たずして、デカセギ日系ブラジル人研究の代表作の1つとも言える小内透・酒井恵真編の著作『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』が発表される。これは、小内透を中心とした研究チームが、群馬県太田・大泉地区で行った様々な調査から、日系ブラジル人の動向を調査し、明確に定住化を主張した研究であった。

### 3.2 日系ブラジル人の

#### 定住化を主張する論者の登場

小内透・酒井恵真の『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』と言え、日系ブラジル人の定住化を主張する代表的な研究と目されている。そこで本項では、この著作の中の定住化に関わる議論を追ってみたい。

同書の中で、日系ブラジル人の労働・生活・意識についての研究を発表した小内純子は、アンケート調査の結果をもとに、以下のような考察を行っている。

小内純子（2001：291-5）によると、日系ブラジル人が、「定住するのか」「帰国するのか」「デカセギを繰り返すのか」について、単純に調査結果を見ただけでは判断が出来ないという。ただ、日系ブラジル人の多くは、帰国の意思を持ちながらも定住と帰国の間で揺れ動いており、彼ら／彼女らの滞在期間が長期化している点は指摘できるようだ。

この滞在期間の長期化に関しては、6つの要因が観測されている。1つ目は、ブラジル経済に好転の兆しがみられないこと。2つ目は、ブラジルに居た頃の職業に戻れる可能性が低下していること。3つ目は、来日の目的（主に母国

での生活水準を安定・向上させるための資金の獲得）が達成できていないこと。4つ目は、日本での生活が比較的安定していること（特にエスニック・ビジネスの成功者などがそうである）。5つ目は、日本での、同国人との社会関係が重要になり、同じくらい重要な関係性が母国では失われていること。6つ目は、治安や医療の側面から見た場合の、日本の生活の満足感の高さ。7つ目は、子供の教育問題（日本の教育システムに適応した我が子を、ブラジルに連れて帰りにくい）である。

小内純子は、こうした具体的な要因の根本に、日系ブラジルの抱く「生活の安定」を希求する意識を読み取っている。将来の経済的な安定、社会関係の安定、子供の成長にとっての安定、こうした様々なファクターが最も安定するのはどこなのか、それを模索することが日系ブラジル人の葛藤の源泉であるという。こうした観点から小内順子は、今後の日系ブラジル人の生活において、本国と日本とを往復する「反復デカセギ」が主流になることはないであろうと予測する。本国と日本との往復は、決して「生活の安定」を意味しないと、彼女は考えているからだ。そして、日系ブラジル人が「生活の安定」を求めており、滞日期間も延長傾向を持つなら、そこから、一定数の定住する層が出てくるのも自然であろうと結論する。

こうした小内順子の考察を踏まえた上で、小内透（2001：351-6）は、群馬県太田・大泉地区の日系ブラジル人を、以下のように分析する。

太田・大泉地区は、当初、人手不足から「不法」就労であっても外国人労働者に頼らざるを得ない地域であった。しかし、「不法」労働者の雇用は、企業側にとってもリスクの高い選択であった為、90年の入管法改定の動きを睨みながら、行政と企業が協力して、日系ブラジル人労働者の導入を模索し始める。これが、ブラジル側の経済的不安定とも相まって、太田・大泉地区への日系ブラジル人労働者の流入を可能に

したのである。また、行政も、比較的豊かな財政基盤を背景に、日系ブラジル人に対する公平な行政サービスを提供するよう努力する。その結果、日本の他地域で就労していた日系ブラジル人たちが、生活の根拠を求めて、この地域に集まるようになった。こうした日系ブラジル人の増加は、彼らを対象としたビジネスを成立させる。このビジネスの担い手は、当初、日本人であったが、その後、日系ブラジル人自身の起業も相次ぐ。日系ブラジル人によるエスニック・ビジネスの活発化は、エスニック・コミュニティの形成を促進することになった。エスニック・コミュニティの発達には、日系ブラジル人の内部にも、幾つかの社会層を発生させ、その中には、定住化に積極的な層も存在し始める。小内自身の言葉を借りるなら、「日系ブラジル人の流入は、資本と労働の論理から始まり、やがて生活と経営の論理を伴う形で（小内透 2001：353）」進む。そして、「多様な層がそれぞれの論理にもとづいて短期または長期に居住することによって、国内外を移動する労働者層を多く抱えながら、日系ブラジル人の定住化の傾向が進んでいると捉えられる（小内透 2001：356）」ということになるのである。

こうした小内透の考え方を補強するように見える直近の研究もある。濱田国佑（2005）の研究がそうである。濱田は、ブラジル人集住地区に住む学齢期のブラジル人児童およびその親や群馬県太田市・大泉町のブラジル人学校3校の生徒や親にアンケート調査を行い、そこから以下のような結論を引き出している。

濱田（2005：238-9）によると、調査した時点の日系ブラジル人やその家族は、日本での滞日を長期化させる傾向があった。また滞日の長期化は、デカセギ意識を薄め、日本での生活を楽しむ風潮を生じさせていると言うのである。こうした結果は、素直に受け取れば、小内透の滞日長期化によって生活基盤が日本に移転され、その結果、定住化傾向も強まるという主張を補

強しているように思われる。

### 3.3 定住化必然論と「4段階モデル」

さて、小内透に代表されるような定住化議論は、基本的に、デカセギの長期化と定住化傾向の進展が正比例の関係にあると考えているものが多かった。こうした解釈は、90年代の代表的な移民研究者である S. カースルズと M. J. ミラーの主張に影響を受けていると思われる。S. カースルズと M. J. ミラー（Castles and Miller 1993）によると、移民の発展過程は以下のような「4つの段階モデル」に要約できるといふ。

- 段階1：若い労働者の一時的な労働移民が主で、海外送金と母国への帰国志向が強い段階
- 段階2：滞在の延長と、血縁や出身地域の共通性と新しい環境における互助の必要性に基づいた社会的ネットワークの発展する段階。
- 段階3：家族呼び寄せの開始と、受入国への関与の増大にともなう長期定住の意識が高まり、独自の機関（協会、店、飲食店、代理店、専門職）を持つエスニック・コミュニティの出現する段階。
- 段階4：永住の段階となるが、受入国政府の政策や人々の態度いかんでは、永住権が法的にあたえられ安全な地位や市民権獲得ができるか、あるいは政治的排除や社会経済的に周辺においやられ、永久にエスニック・マイノリティに閉じ込められるかのいずれかの道に分かれる。（Castles and Miller 1993：25=1996：26）

こうして見てみると、日系ブラジル人の定住化が進行しているという立場が、S. カースルズと M. J. ミラーの図式をなぞるものである

ことが良く分かる。定住化の進展を唱える立場の論者が、客観的状況（生活の重心が何処にあるか）と主観的意図（日本に定住したいと思っているか）を切り分け、客観的な状況の進展が、定住意思の獲得を呼び寄せると考えているのも、その証左であろう。また主観的には定住意思の無い日系ブラジル人であっても、客観的な状況から定住化傾向が読み取れるのは、こうした解釈枠組みに依拠しているからである。

そして、S. カースルズと M. J. ミラーの「4段階モデル」に照らし合わせるなら、今の日系ブラジル人は3段階目の状況にあると思われる。もし、そうであるなら、日本社会は、今後、政治的・経済的・社会的な排除を伴う移民問題を発生させるか、新たな共生社会を構築できるのかの境目にあることになる。小内透を始めとする定住化論者が、地道な調査を繰り返し、日系ブラジル人の定住化傾向を発表し続けるのは、こうした目前の問題に対して警鐘をならす意味合いを持つのである。

ところが、こうした S. カースルズと M. J. ミラーの「4段階モデル」を援用する定住化論に対して批判的な立場が登場する。2005年以降の日系ブラジル人の定住化論を牽引している「顔の見えない定住化」議論がそうである。そこで、次に、こうした定住化論に批判的な「顔の見えない定住化」議論について見ていきたい。

## 4 定住化論に対する批判

### 4.1 「4段階モデル」を援用する

#### 定住化論に対する批判

S. カースルズと M. J. ミラーの「4段階モデル」を援用する日系ブラジル人の定住化論に対して疑問を投げかける代表的な著作は、2005年に出版された梶田孝道・丹野清人・樋口直人の『顔の見えない定住化』である。特に樋口（2005a：12-4）は、「4段階モデル」に対して、欧州の戦後の経験を一般化しているに過ぎず、

3つの大きな限界があると主張する。以下にその限界を列挙してみたい。

限界の1つ目は、「4段階モデル」が、記述概念の域を出ておらず、移住過程の規定要因の論理的な説明にはなっていない点である。

2つ目は、欧州の移住労働者を取り巻く環境の変化が、全く考慮されていない点である。欧州では、1960～70年代の移住労働者の「受入」から「停止」を経て「定住化」に至る時代と、90年代以降の移民・難民規制を厳格化し、非正規移民が増大した時代では、社会背景が全く異なっている。そうした「異なる条件下では異なる移住過程が進展する」と考えるほうが妥当ではないかと言うのである。

3つ目は、トランス・ナショナリズムのような、近年提唱されている新たな移住過程を捉えきれない点である。つまり「定住／帰国」という二項図式に当てはまらない状態が発生した場合、説明力が決定的に低下してしまうのである。

こうした「4段階モデル」の限界を指摘することで、樋口は、従来の研究に一石を投じようとする。つまり、一時滞在から定住化へ至る道を図式化する「4段階モデル」は、広く様々な外国人労働者や移民問題に適応できる可能性を持つ説得的な図式ではあるものの、移住過程の必然的な流れと見なすことは出来ないと主張しているのだ。

そして、定住化を主張する研究者が、「4段階モデル」を念頭に置いた定住化論を、自明の理として展開することに違和感を表明するのである。樋口が目から見れば、日系ブラジル人の移住過程は、「4段階モデル」からは逸脱する独自パターンを示しており、定住化論を唱えるにしても、新たな構図の提出が不可欠に思えるからだ。

では、樋口が考える日系ブラジル人に独自の移住パターンとはどのようなものなのであろうか。樋口（2005b：280）が、日系ブラジル人問題に独自の要素であると見なしているのは、

日本の入管政策の在り方と、その結果発生すると思われる教育問題である。

まず、日本の入管政策の在り方について見てみよう。

日本の入管政策は、在留資格を大きく2つのカテゴリーに分類する。1つは、活動に基づく在留資格であり、もう1つは身分または地位に基づく在留資格である。通常、日本に入国する外国人は、活動に基づく在留資格に分類され、多くの制限を受けることになる。日本政府は、基本的に、高度な知識や技術を持った外国人の流入は促進するが、そうではない者に対しては障壁を設け入国を制限している。従って、単純労働を目的とした外国人は入国することが困難であるし、ましてや定住に至る可能性は極めて低い。

ところが、もう一方の、身分または地位に基づく在留資格で入国できれば、事態は大きく異なる。「永住者」「日本人の配偶者」「永住者の配偶者」「定住者」という区分からなるこの在留資格には、入国や就労に関する制限が全くないからだ。現在、日本に流入している多くの日系ブラジル人は、この「定住者」あるいは「定住者の配偶者」で日本に入国している<sup>1)</sup>。従って、日系ブラジル人は、資格の上では母国と日本とを自由に行き来することが可能なのである。こうした状況を、樋口（2005c：280-1）は、第二次世界大戦後の西欧諸国の経験を引き合いに出しながら、以下のように論ずる。

一見逆説的だが、出入国がオープンな状態に保たれており、母国とデカセギ国との間を自由に行き来できる場合、外国人労働者は定住を選択しない。逆に、出入国に厳しい制限が掛かると、定住を選択する者が増加する。なぜなら、そうした状況下では、一度国外に出てしまうと、再び国内に戻ることは困難となるため、むしろ国外には出ない生活（定住）を模索するインセンティブが高まるからである。

そして、この図式を、デカセギに來ている日

系ブラジル人たちに当てはめて見ると、彼らが定住化する可能性を低く見積もることも可能である。なぜなら、前述したように、「定住者」の資格で入国する日系ブラジル人に対して、日本の出入国のドアは開かれており、定住へのインセンティブが働かないからだ。これが、樋口の指摘する「4段階モデル」に合致しない要素の1つ目となるのである。

次に、教育問題について見てみよう。日系ブラジル人の定住化について論ずる場合、子供の問題は重要である。それは、幼少期にデカセギ国へ連れて来られたり、あるいはデカセギ国で生まれたりした子供たちが、母国の言語に習熟しないという問題が発生するからだ。加えて、こうした子供たちは、自分の人生のかなりの期間をデカセギ国で過ごしているため、生活の基盤が、主観的にも客観的にも日本に築かれており、ブラジルに帰国したいという意思も曖昧になっていく。日系ブラジル人の子供のことを中心に考えるなら、現状では、日本で受けられる教育や獲得できる学歴には限界があるため、そうした状況が望ましいとは言えない。しかし日本社会しか知らない子供たちを、ブラジルに帰国させれば問題が解決するというわけでもない。もちろん、いつか来る帰国の日に備えてブラジル人学校に通わせるという方策もあるが、そこに通う事ができる者は地理的にも経済的にも限定されざるを得ない。

しかも、樋口（2005b：282）の調査によると、日系ブラジル人の「滞日意識」や「実際の行動」に、「子どもの教育」というファクターが影響を及ぼすことはほとんどないという。そうであるならば、多くの場合、「子どもの教育」は、「親の生産活動」に従属させられており、親の就業地区や就業形態が変化すれば、そのしわ寄せを正面から受けてしまうと考えられる。

樋口は、こうした状況を、「4段階モデル」が想定していた図式とは異なる2つ目の要素だと考えている。なぜなら「4段階モデル」では、



「家族呼び寄せの開始」と「受入国への関与の増大にともなう長期定住の意識」の高まりは同時期に進行することになっているが、多くの日系ブラジル人たちは、家族を呼び寄せた後も帰国を前提とした労働形態を修正せず、子供の教育問題は二の次にされていくからだ。

さて、以上が、樋口の指摘する日系ブラジル人に独自の移住のパターンである。そして、こうした「4段階モデル」では解釈しきれない要素の存在を認めるならば、日系ブラジル人の定住化を説明する新たなモデルの必要性が理解される。樋口が、梶田・丹野と共に提出する「顔の见えない定住化」という概念は、そうした要請に答えるものなのである。次項では、この「顔の见えない定住化」という概念と、それを導き出すに至った背景について見てみよう。

#### 4.2 「顔の见えない定住化」とその背景

「顔の见えない定住化」とは、日本における日系ブラジル人の置かれた状況を説明するために作り出された概念である。製作者である梶田・丹野・樋口は、この概念の製作に至る理論的過程を、一冊の本にまとめ、『顔の见えない定住化』と題して出版した。この著作を、デカセギ日系ブラジル人研究の流れの中に位置付けるなら、小内透の『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』と並ぶ、代表的な研究であると言えるだろう。

この著作の最終章で、樋口は、「顔の见えない定住化」とは「就労の論理に従属した生活様式の形成なのである（樋口 2005d：290）」と主張している。もちろん、多くの外国人労働者や移民は仕事を求めて受入国に流入するのだから、生活様式が「就労の論理」に影響をうけないということは有り得ない。しかし、樋口が、S. カースルズとM. J. ミラーの「4段階モデル」と距離を取りながら、「顔の见えない定住化」という概念を主張するのは、日系ブラジル人の形成する生活様式が、「4段階モデル」が

想定したものよりも遥かに強く、「就労の論理」に取り込まれ、最適化させられていることを示すためである。前項で取り上げた日系ブラジル人に独自の移住パターンも、この構造に寄与するものと考えられている。そこで、以下に、樋口による「顔の见えない定住化」議論をまとめてみたい。

樋口（2005d：287-90）によると、日系ブラジル人の生活様式が「就労の論理」に取り込まれていく原因として、フレキシブルな労働力を求める労働市場とブラジル人労働者の意識との共進化が挙げられるという。この共進化の始まりは、入管法改定と景気後退が重なる90年代前半にさかのぼる。いわゆるバブル経済が破綻し景気後退が始まると、日本企業は、必要な労働力を、正社員として確保するのではなく、必要な時に必要なだけ活用する方法を模索し始める。そして、その日本企業の目に留まったのが、「労働力貯水池」としての日系ブラジル人労働者であった。

日系ブラジル人のデカセギは、80年代の前半から、日系1世によって、ある程度、行われていた。この時期のデカセギ労働者たちは、ブラジルに帰国してから、雇い主の意を受けて、日本とブラジルの労働市場を結び付ける斡旋組織の担い手となる。こうして出来上がるのが、「市場媒介型移住システム」である。しかし、初めは、このシステムも、小規模なものに過ぎなかった。やはり大きな転換点となるのは、90年入管法によって日系3世の合法的な就労が認められたことである。80年代後半から形成されてきた「市場媒介型移住システム」は、入管法改定の追い風を受けて、日本企業の労働需要にジャスト・イン・タイムで対応するデカセギ事業を成立させたのである<sup>2)</sup>。

こうした市場媒介型の移住システムやデカセギ事業の成立は、日系ブラジル人たちの生活様式にも影響を与えた。ブラジルの経済的不振を背景に、短期的な高賃金労働を求めて日本に渡っ

てくる日系ブラジル人にとって、こうした「市場媒介型移住システム」は都合の良いシステムであるかのように見えた。しかし、この流動的で一時的な雇用システムは、このシステム内部の日系ブラジル人に、長期的な戦略を立てるよりも、短期的な金銭の獲得を重視するほうが合理的であるような構造を提供し続ける。そのため、強固な意志で長期展望を描かない限り、短期的な戦略（＝すなわちデカセギ労働）に捕らわれ続けることになる。

しかも、こうした短期的な展望しか描けない状況が、基本的には便利で望ましいシステムとして認識されるため、日系ブラジル人は、自らの生活スタイルを、進んでデカセギに適応させていく。こうして一時滞在のデカセギ労働者という自己規定が、日系ブラジル人自身の手によっても維持され続け、社会保険の未加入や偽装請負といった問題を、デカセギ労働者と経営者が共犯的に行ってしまう一因となる。これが、フレキシブルな労働力を求める労働市場とブラジル人労働者の意識との共進化なのである。

ところで、「4段階モデル」に依拠する定住化論では、デカセギ労働者がそうした状況下に置かれていたとしても、移民コミュニティの発展が徐々に彼らの定住志向を強め、いつかは日系ブラジル人も定住化を始めると予測する。これは、「4段階モデル」の定住化論者の想定する移民コミュニティが、互酬性に基づいた相互扶助的なコミュニティであり、そこに参加する為には、一定のコミットメントを要求されると考えているからだ。

しかし、樋口はこうしたモデルに対しても慎重である。「顔の見えない定住化」に収録された別の論文で樋口（2005b：91-5）は、現在の日系ブラジル人コミュニティが、市場交換の原則に立脚した移民コミュニティに分類されることを強調する。市場媒介型の移民コミュニティでは、互酬的な相互扶助メカニズムが、金銭を介したサービスへと置き換わっている。そのた

めこうした移民コミュニティでは、個々の日系ブラジル人がサービスを利用する消費者のような立場におかれ、個人間の紐帯が形成され難い。従って、個々人の紐帯を基盤として蓄積される社会的資本も相対的に薄いものに成らざるを得ず、定住化論者が期待するようなコミットメントは生まれないと考えているのである。これも、流動的な労働市場とブラジル人労働者の意識が共進化し、日系ブラジル人の生活様式が「就労の論理」に取り込まれていく原因となっている。

また、日系ブラジル人が「就労の論理」に取り込まれていく過程で、もう1つ興味深い現象が指摘される。それは「労働問題とエスニシティ問題の読み替え」とでも呼ぶべき事態である。例えば、樋口（2005d：295-7）は、日系ブラジル人研究の中でしばしば取り上げられる団地問題（都築 1995, 1996, 1998, 1999, 2003, 2004）などを例にとりながら、この問題を指摘する。団地問題とは、日系ブラジル人の集住地区で散見される、住民と日系ブラジル人の共生を巡る議論の1つである。そこでは、「ゴミの出し方」や「騒音」といった地域での生活マナーの共有に焦点が当てられ、民族的文化の異なる「日本人」と「ブラジル人」がどのようにして理解し合うかといった図式で分析がなされている。

しかし、樋口は、こうした図式に疑義を呈する。地域マナーが共有できない原因を、「エスニシティ」の差異として記述するのは危険だというのである。こうした問題は、不安定な就労状態にある日系ブラジル人が、経済格差や雇用形態ゆえに地域マナーを学ぶ機会や動機を得られず、結果として住民と衝突している可能性も高いというのだ。

こうしたマナーの共有の問題は、半年ないし1年でメンバーが入れ替わるトヨタの日本人期間工の寮でも散見される問題である。日本人期間工と日系ブラジル人の置かれた状況には類似点が多く、発生している問題にも重なり合うところが多い。つまり、論理的には同じ状況であ

ると見なし得る。しかし、そうであるにも関わらず、トヨタの「期間工」という属性は存在しないが、「ブラジル人」という属性は存在する。

結果として、「期間工」たる「ブラジル人」が、特定地域の特定雇用部門に集中して起こす問題は、「期間工」の問題ではなく、「ブラジル人」の問題にされてしまう。樋口は、こうした傾向に警鐘を鳴らしているのだ。彼は、問題の、経済的・政治的背景を強調した上で、この議論を「少なくともブラジル人に関する限り、問題を（民族間の）文化対立や地域摩擦として捉えるのは不適切で、『政府の失敗』『市場の失敗』に起因するものとみるべきである（樋口 2005d：297）」と締め括っている。

最後に、樋口が主張する「顔の见えない定住化」の問題点と処方箋についてもまとめておこう。「顔の见えない定住化」とは、「（コミュニティとの）切り離し装置としてブラジル人雇用が生じることにより、ブラジル人の側に短期的な移動を行為の前提とする誘因が働く。それに相応して（ブラジル人が）短期的に最大の利益を生み出す適応行動をとった結果（樋口 2005d：291）」現れる構造だと言える。

そして、樋口（2005d：291-2）は、こうした構造の中でも、長期的に見れば、日本で一生のほとんどを過ごす日系ブラジル人は増加すると考える。しかし流動的な労働市場とブラジル人労働者の一時滞在意識が共進化している以上、日系ブラジル人が長期的な展望に基づく居住に至るまでの時間は、「四段階モデル」の定住化論が想定するよりも長いものに成らざるを得ない。その際、流動的なデカセギ労働者とデカセギを受け入れる地域社会の軋轢や、親の流動性の影響を受けて教育機会を減少させる子供の問題が放置されやすくなる。これが「顔の见えない定住化」が招く問題である。

こうした問題の解決策として樋口（2005d：291-2, 297-300）が提示するのは、権利とコミュニティの強化である。樋口は、前者を「社会的

統合を実現するためのルール」として捉え、後者を「社会的統合を実践するための資源」だと考えて、次のような方策を推奨する。まず、権利（特に労働に関する権利）強化の側面から、外部不経済をもたらす労働のフレキシブル化に歯止めを掛けるようなルールを確立し、日系ブラジル人の生活を安定させる。次にコミュニティ強化の側面から、移民コミュニティを「市場媒介型」から「互酬扶助型」に移行させるような環境を整備し、日系ブラジル人が統合を実践するための社会的資源を確保する。もちろん、経路依存性が働いている現行の移住システムを変革するためには、適弁に国家が介入し、システムを適切な方向へ再構築する必要もあるだろう。これが、樋口によって提示される「顔の见えない定住化」への処方箋である。

## 5 「顔の见えない定住化」以降の動き

さて、本論の締め括りとして、昨今の日本経済の動向にも触れておかなければならないだろう。2008年末に顕著になった不況を理由として、日本を代表する大企業の多くが、派遣労働者を解雇する「派遣切り」を行っている。日系ブラジル人の定住化を論ずる上で、この現象は、大きな転換点となる可能性を孕んでいる。

90年代の不況は、大雑把に言って、日本人の正社員が日系ブラジル人労働者に置き換わっていく要因として機能した。しかし、昨今の不況では、十分に正社員の数を調整した企業が、いよいよ雇用の調整弁として派遣労働者の解雇に乗り出しているように見える。これは、多くの日系ブラジル人労働者が、働く場所を失う事態を帰結するだろう。こうした構造の変化は、「4段階モデル」や「顔の见えない定住化」が想定していた問題の構図を、大きく変動させる。「働く場所」が安定的に確保されなければ、定住は覚束かず、不特定の労働者が激しく入れ替わりつつも継続されるエスニック・コミュニティ

ですら運営が難しくなるからだ。そうなれば、日系ブラジル人の長期滞在そのものが不成立となり、日系ブラジル人は、ピンポイントで導入された外国人労働者であったということになるだろう。

ただし、それで日系ブラジル人労働者の問題が消えてしまう訳ではない。例えば、ブラジルに帰国する賃金や当座の生活費を捻出できない労働者が多数発生する可能性がある。また、母国での生活習慣を身に付ける機会が無かった日系ブラジル人子弟の問題も表面化するだろう。これらは、日系ブラジル人特有の問題と言うことではなく、景気の変動などに合わせて都合よく外国人労働者を導入した際の帰結として、外国人労働者の一般的な問題と成り得るものである。もちろん現状では、こうした考えは、予測の域を出るものではない。しかし、既に日本社会で生活している多数の日系ブラジル人や彼らが置かれた社会構造を注視していく必要性は、近年益々増加していると言えるだろう。その際、これまでに蓄積された日系ブラジル人の定住化に関する知見と新しい現象を突き合わせ、問題の本質を探ることが、日系ブラジル人研究の焦眉の課題となっているように思われる。

#### 注

- 1) 定住者と永住者の違いは、更新の有無である。「永住者」は更新をする必要がないが、「定住者」は最長でも3年に1度、在留資格を更新しなければならない。
- 2) 厳密に言うと製造業の現場に人材派遣業が解禁されるのは2004年の法改正を待たねばならない。従って、この時期に、製造業の現場で行われていたのは業務請負業である。だが、多くの日系ブラジル人たちは、自分の所属する業務請負会社を「派遣会社」と呼んでいた。これは偽装請負が常態化していた為であると思われる。

#### 引用文献

Castles, Stephen, Mark J. Miller, 1993, *The Age of Migration*, London: Macmillan. (=1996, 関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会)。

- エウニセ・A・イシカワ・コガ, 2000, 『『出稼ぎ滞在者』と『住民』の間で——日系南米人の地域社会参加』宮島喬編『外国人市民と政治参加』明石書店, 130-149。
- 浜松市企画部国際交流室, 1998, 「浜松市における外国人の生活実態・意識調査」駒井洋編『新来・定住外国人資料集成 下巻』明石書店, 285-678。
- 濱田国佑, 2005, 「在日ブラジル人の定住化とその意識」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第97巻: 225-239。
- 樋口直人, 2005a, 「序章 デカセギと移民理論」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会, 1-22。
- 樋口直人, 2005b, 「第3章 移住システムと移民コミュニティの形成——移民ネットワーク論からみた移住過程」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会, 76-105。
- 樋口直人, 2005c, 「第10章 一時滞在と定住神話の交錯——ブラジル人労働者の滞日見通しをめぐって」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会, 259-284。
- 樋口直人, 2005d, 「第11章 共生から統合へ——権利保障と移民コミュニティの相互強化に向けて」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会, 285-305。
- 法務省入国管理局, 2008, 『在留外国人統計』財団法人入管協会。
- 石川雅典・川原素子, 1995, 「4章 日系ブラジル人の就労と生活の実態 群馬調査・浜松調査の結果より」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 (上)論文編・就労と生活』明石書店, 95-136。
- 伊豫谷登士翁, 2000, 「グローバル化と定住外国人の政治参加」宮島喬編『外国人市民と政治参加』明石書店, 75-93。
- 国際協力事業団, 1995, 「日系人本邦就労実態調査報告書」駒井洋編『外国人定住問題資料集成』明石書店, 75-280。
- 喜多川豊宇・藤木三千人・嶋澄, 1992, 「ヒトの国際化に関する総合的研究——特に外国人労働者に関する総合的研究 3 日系ブラジル人労働者の実態調査 群馬県大泉町とサンパウロ市郊外サズノ市日系人集団地福博村の調査を通じて——「永住型」・「分居型」・「出稼ぎ型」の基本3類型 補遺 JAMIC 設定入植地出稼ぎ状況」『東洋大学社会学部紀要』Vol.29 No.2: 96-133。

- 倉 真一, 1995, 「定住化のなかの就労 外国人労働者から定住外国人へ」駒井洋編『講座 外国人定住問題 第2巻 定住化する外国人』明石書店, 47-72。
- 駒井 洋, 2002, 「グローバル化時代の移民政策」駒井洋編『講座 グローバル化する日本と移民問題 第1期 第1巻 国際化のなかの移民政策の課題』明石書店, 21-50。
- 森 幸一, 2000, 「第11章 還流型移住としての《デカセギ》——ブラジルからの日系人デカセギの15年」森廣正編『比較経済研究所研究シリーズ15 国際労働力移動のグローバル化——外国人定住と政策課題』法政大学出版局, 347-376。
- 小内純子, 2001, 「8章 日系ブラジル人の労働・生活と意識」小内透・酒井恵真編『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房, 267-298。
- 小内 透, 2001, 「終章 日系ブラジル人の定住化と地域社会の変化」小内透・酒井恵真編『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房, 351-373。
- 小熊英二, 1998, 『〈日本人〉の境界』新曜社。
- 下平好博, 1999, 「8 外国人労働者——労働市場モデルと定着化」稲上毅・川喜多喬編『講座社会学6 労働』東京大学出版会, 233-271。
- 坂中英徳, 2008, 「闘論」毎日新聞2008年1月20日: 4。
- 田島久歳, 1995, 「ラテンアメリカ日系人の定住化 出身国別の一考察」駒井洋編『講座 外国人定住問題 第2巻 定住化する外国人』明石書店, 163-198。
- 丹野清人, 1999, 「外国人労働者の法的地位と労働市場の構造化——日本における西・南アジア系就労者と日系ブラジル人実証研究に基づく比較分析」『国際学論集』通号43: 43~63。
- 丹野清人, 2005a, 「第2章 企業社会と外国人労働者市場の共進化——移住労働者の包摂過程」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会, 52-75。
- 丹野清人, 2007, 『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会。
- 渡辺雅子, 1995, 「12章 親からみた日本の学校教育と将来の生活設計」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 (上) 論文編・就労と生活』明石書店, 353-409。
- 渡辺雅子・アンジェロ・イシ, 1995, 「18章 日系ブラジル人の『出稼ぎ』の行方」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 (上) 論文編・就労と生活』明石書店, 607-625。

(ながみつ たいし 佛教大学非常勤講師)